

論文

中学校吹奏楽部活動における編曲の実践的研究

A Practical Study of a School Song Arrangement for Junior High School Wind Band Club Activities

岩田憲知 (高知大学大学院教育学専攻)¹

前田克治 (高知大学教育学部門)²

山中文 (高知大学教育学部門)³

IWATA Noritomo¹, MAEDA Katsuji² and YAMANAKA Aya³

1 Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Kochi University

2 Education Unit, Humanities and Social Science Cluster, Kochi University

3 Education Unit, Humanities and Social Science Cluster, Kochi University

ABSTRACT

The purposes of this study were twofold: 1) to create an amazing musical arrangement of a wind band score of a school song for junior high school wind band club activities; 2) to foster students' awareness and understanding of music analysis by the arranged score-based activities.

For these purposes, considering students' playing skills, we first arranged the score of the school song of Junior High School Affiliated to the Faculty of Education, Kochi University. And then the wind band members played and listened to it.

We conducted survey research, and the results showed that members appreciated the arranged score and perceived the change in musical construction and the significance of orchestration.

I 問題の所在

本研究の目的は、中学校吹奏楽部の編成や生徒の実態に応じた編曲作品を開発し、生徒にとって取り組みやすいオーケストラレーションと音楽的魅力のバランスを検討することにある。また、それらを生徒が意識する機会を提供することにある。

近年の中学校吹奏楽部の編成は小編成が一般的であるが、その小編成に特化した指導法や演奏曲が未開発であることを、岡田らが2006年に指摘している¹⁾。岡田らによれば、吹奏楽連盟支部が主催するコンクールの中学校、高等学校部門において、選曲や編曲、演奏表現に不自然さが多く見られたという。

本研究では、このような中学校吹奏楽部の実態から、生徒がその音楽的魅力を感じ取っていきながら、演奏に意欲的に取り組んでいける編曲作品を開発する。そして、原曲と編曲を演奏や鑑賞を通じて、吹奏楽部の生徒が、どのように音楽的構成の変化やオーケストラレーションの違いを読み取っているかを測る。

そのために、本稿では、高知大学教育学部附属中学校（以下、附属中学校）の校歌『みなもと遠く』を原曲として取り上げ、同中学校吹奏楽部において実践を行なった。校歌は中学校吹奏楽部では行事における曲目として必ず演奏する楽曲であり、演奏になじんでいる。そのため、中学生が、原曲と編曲の違いを、演奏を通して聞き分けることができると考えたからである。

なお、本稿における編曲は岩田が行ったものである²⁾。本稿では、三者の討議により、事後調査、編曲に関する考察を新たに加え、全体をまとめた。校歌の原曲と岩田版Ⅲは、稿末に掲載した。

II 研究の方法

研究は以下の手順で行った。

■第一次調査

□吹奏楽部事前調査

附属中学校吹奏楽部練習を観察し、聞き取り調査を行った。

【実施日】2011年10月22日（土）

【対象】附属中学校吹奏楽部員1～3年（28名）

□編曲1

吹奏楽部状況調査を踏まえ、以下の楽曲において、第一次編曲（以下、岩田版Ⅰと略記）を行った。

【編曲作品】附属中学校校歌『みなもと遠く』（内田八朗作詞／真鍋伝一作曲）

□演奏および質問紙による調査

附属中学校吹奏楽部員による演奏、および附属中学校吹奏楽部員と指導者対象の質問紙調査

【実施日】2012年1月29日（日）

【対象】附属中学校吹奏楽部2・3年生（21名）、指導者

■第二次調査

□編曲2

第一次調査における演奏および質問紙調査を踏まえ、以下の楽曲において、第二次編曲（以下、岩田版Ⅱと略記）を行った。

【編曲作品】附属中学校校歌『みなもと遠く』（内田八朗作詞／真鍋伝一作曲）

□演奏および質問紙による二次調査

附属中学校吹奏楽部員による演奏、および附属中学校吹奏楽部員と指導者対象の質問紙調査

【実施日】2012年6月23日（土）

【対象】附属中学校吹奏楽部2・3年生（23名）

□附属中学校吹奏楽部員を対象とした鑑賞比較調査

附属中学校校歌『みなもと遠く』（内田八朗作詞／真鍋伝一作曲（以下本間版³⁾と略記）と岩田版Ⅰ、岩田版Ⅱを鑑賞してもらい、質問紙調査を行った。

調査における全ての版の演奏は、高知大学教育学部生涯教育課程芸術文化コース管・打楽器専攻生の演奏に統一して録音し、用いた。

【実施日】2012年7月7日（土）

【対象】附属中学校吹奏楽部1～3年生（36名）、指導者

III 結果と考察

3.1 吹奏楽部状況調査

この事前調査は、高知大学教育学部附属中学校吹奏楽部の練習を参観の上、聞き取り調査として行った。聞き取り調査の内容は、不得意な「音域」と「技術」についてである。なお、今回の調査は、高知大学教育学部附属中学校吹奏楽部の楽器編成上不足するパートがないように、全パートの生徒に行った。以下にその調査結果をまとめる（表1）。

表1 事前調査結果

パート	学年	不得意な音域	不得意な技術
Fl.	1	低	・連符 ・タンギング
	2	低	
	2	高	
Bsn.	3	高	・フィンガリング ・連符
	2	高	
Cl.	2	高	・連符 ・タンギング
	3	高	
	3	高	
B.Cl.	2	高	・連符
	3	高	
A.Sx.	3	低	・読譜 ・連符
T.Sx.	2	高	・連符
B.Sx.	1	高	・ロングトーン ・タンギング ・音色
	3	高	・アインザッツ ・タンギング

Trp.	1	高(-G5)	・連符
	1	高(-G5)	
Hrn.	1	高	・音色 ・ピッチ
	1	高	
	2	低	・タンギング
Trb.	3	高	・音色
	1	低	
	2	低	・ダブルタンギング
Euph.	3	低	・リップスター ・高速パッセージ
	3		低
Tuba	1	低	・タンギング
	3	低	・音処理
St.B.	3		・arco, pizz. 共に不得意
Perc.	2		・鍵盤打楽器(Sus.Cymは得意)
	2		・鍵盤打楽器が得意

3.2 岩田版1の作成

3.2.1 楽器編成

楽器編成は、3年生の引退などの人数の増減に対応するため小編成を選択し、全日本吹奏楽連盟が朝日作曲賞の公募要項で規定しているものを基本とした。編成の内訳は以下の通りである。

Fl. 2 / Ob. 1 / Bsn. 1 / Cl. 6 / B.Cl. 1 / A.Sx. 2 / T.Sx. 1
 B.Sx. 1 / Trp. 3 / Hrn. 2 / Trb. 3 / Euph. 1 / Tuba 1
 St.B. 1 / Perc. 3 (数字はパート数)

譜例1 1～5小節目

①本間版

Musical score for measures 1-5. The score is in 4/4 time and B-flat major. It features parts for Flute (Fls.), Clarinet (Cls.), Oboe (Ob.), Alto Saxophone (A.Saxes.), Horn (Hrn.), Trumpet (Trbs.), Basses, and Percussion (S.D., B.D.). The woodwinds play a melodic line with some grace notes, while the brass and percussion provide a rhythmic accompaniment.

②岩田版1

冒頭5小節間はファンファーレとした。最上段に出てくる連符は変ロ長調の音階である。連符が不得意な生徒も音階であらば比較的吹き易いと考えて用いた。2段目4小節3・4拍目のリズムは、この編曲を通じた重要な動機である。

Musical score for measures 1-5, annotated for the Iwata version. It includes parts for Flute (Fl.), Oboe (Ob.), Clarinet (Cl.), Alto Saxophone (A.Sx.), Trumpet (Trps.), Tenor Saxophone (T.Sx.), Horn (Hrns.), Trumpet (Trbs.), Tuba, Euphonium (Euph.), Stripped Bass (St.B.), Low Woodwind (Low W.W.), and Timpani (Timp.). Annotations include dynamics like *mp* and *f*, and a note about the rhythm: "何度も登場するリズム動機" (Rhythm motif that appears repeatedly). The score shows a fanfare-like introduction with a specific rhythmic motif in the second system.

3.2.2 編曲作品の特徴

中学校吹奏楽部のための編曲としては、(1) 楽器の特徴を活かすこと、(2) 中程度の難易度であること、さらに(3) 編曲効果として高水準の演奏効果が得られること、以上の3点が主な目標になるかと考えられる。また、事前調査の結果から、吹奏楽部員の不得意とする音域が明らかになり、また木管楽器を中心に「連符」⁴⁾に対する不安が強いことがわかった。このことから、さらに、(4) 不得意な音域をできるだけ避けること、(5) 木管楽器に連符を多用しないこと、(6) 速いタンギングを必要とする音型を用いないこと、以上の3点に留意した。(4)に関しては、朝日作曲賞の公募要項で規定している「標準音域表」を参考にしつつ、生徒の不得意な音域を避けたが、その楽器の持つ特徴的な音域(例：フルートの高音域、チューバの低音域など)においては、その限りではない。

編曲作品の特徴は以下の通りである。詳細は譜例1～4(簡易総譜、実音記譜)を参照されたい。

- ①音域、曲の響きを考え、へ長調(原曲)から変ロ長調に変更した。
- ②和音設定をし直した。
- ③演奏効果が高まるよう、徐々に盛り上がっていく構成にした。

譜例2 6~9小節目

①本間版

②岩田版 I

本間版では主音と属音が交互に現れるオルタネーティング・ベースが用いられており、重厚感のある行進曲風の楽想であった。岩田版 I ではバスラインを順次進行にし、トロンボーンにビギンのリズムを用いることで躍動感のある楽想にした。

譜例3 10~13小節目

①本間版

②岩田版 I

テナー・サクソフォンとユーフォニアムにオブリガートを追加し、メロディのオーケストレーションも徐々に厚くしていくことで、自然な抑揚が感じられるように配慮した。

譜例 4 14～17 小節目

①本間版

②岩田版 I

14～17 小節目は木管楽器を中心としたアンサンブル部分である。クライマックスに向かって盛り上がっていくが、クレッシェンドと併せて和声的リズムを切迫させていくことで、更に高揚感を高めた。

3.3 岩田版 I の演奏および質問紙調査結果

岩田版 I を高知大学教育学部附属中学校吹奏楽部員による演奏後、部員、指導者⁵を対象とし、質問紙調査を行った。

生徒には、演奏してみてどうであったのか、「技術的な点」及び「表現のし易さ」の二項目について五段階での評価を行って

もらった。また、指導者には、附属中学校吹奏楽部に適しているのかという観点から、「技術的な点」「表現のし易さ」「オーケストレーション」及び「演奏効果」の4点を質問項目とした。

「技術的な点」及び「表現のし易さ」について、以下が吹奏楽部員 21 名の調査結果である（表 2）。

表 2 質問紙調査結果

・演奏してみてどう思いましたか？（1：易しい～5：難しい）

	Fl.	Cl.	Sax.	Trp.	Hrn.	Trb.	Euph.	Tuba	Perc.	全体
技術的な点	4.7	4	4.5	4.5	4.5	3.7	3.0	4.0	4	4.1
表現のし易さ	3.7	3	4.0	3.5	3.5	2.7	2.0	3.0	4.3	3.3

この結果において、「技術的な点」の全体平均が 4.1 となっているように、高知大学教育学部附属中学校吹奏楽部員にとって、今回の編曲は技術的に難しいものであったことが分かる。具体的には、「連符」²と「リズム」という回答が約7割あった。「連符」に関しては、事前調査の結果から編曲の観点として配慮していた。しかし、リズムに関してはあまり重要な観点としておらず、原曲と雰囲気を変えるために用いた三連符が、難易度を高くしてしまったようである。難易度を高く感じてしまった背景には、初見合奏であったこと、時期的な要因（アンサンブルコンテストへの注力、インフルエンザによる学年閉鎖）から合奏練習がしばらく行われていなかったことなどがあるが、吹奏楽部指導者から、中学生の演奏する作品としてはオーケストレーションが全体的に薄く感じられるという指摘もあった。指導者からの評価は、技術的な点が 2（1：不適～5：適）、表現のし易さが 4（1：不適～5：適）、オーケストレーションが 3（1：悪～5：良）、演奏効果が 3（1：低～5：高）という結果であった。

これらから、中学校吹奏楽部を対象とした編曲の次の課題として、技術的難易度とオーケストレーションについて調整する必要があることがわかった。

3.3 岩田版Ⅱの作成

3.3.1 楽器編成

岩田版Ⅱの編曲における楽器編成は、附属中学校吹奏楽部の指導者の希望により、岩田版Ⅰの楽器編成にE♭クラリネットを追加したものとなっている。詳細は以下を参照されたい。なお、斜体表記のパートは演奏者がいなくても演奏が可能のように配慮を行っている。

Fl.2 / Ob. 1 / Bsn. 1 / E♭Cl. 1 / Cl. 3 / B.Cl. 1 / A.Sx. 2 / T.Sx. 1
 B.Sx. 1 / Tpt. 3 / Hm. 2 / Ttb. 3 / Euph. 1 / Tuba 1 / S.B. 1 /
 Perc. 4 (数字はパート数)

3.3.2 編曲作品の特徴

岩田版Ⅱの全体構成は、以下のようになる。(図1)

学校行事においては、吹奏楽部による演奏で校歌を歌うことが少なくない。岩田版Ⅰでは作品の音域や響きを考慮して、原調のへ長調から完全四度上の変ロ長調へ移調したが、そうすると、歌うことが困難であった。そこで、生徒の実態に応じた編曲を行うという今回の目的に合わせ、岩田版Ⅱでは原調であるへ長調に戻した。全体の構成や和声進行は岩田版Ⅰとほぼ共通している。なお、各楽器の使用する音域は岩田版Ⅰと同様に、全日本吹奏楽連盟が朝日作曲賞の公募要項で規定している「標準音域表」を参考に設定した。

この編曲における特徴は、岩田版Ⅰの演奏および質問紙調査で明らかになった、岩田版Ⅰの技術的な課題及び、オーケストレーション的な課題の解決を図った点である。詳細は譜例5、6（簡易スコア、実音記譜）を参照されたい。

まず、技術的な課題については、菅原⁹は、演奏効果が高く演奏技術は平易な編曲を行うための要点として「簡略化」⁷を挙げており、子どもたちなりの技術で音楽的な変化や魅力を表現できるようにする編曲が重要であると述べている。簡略化は一見して、つまらない、目立たないなど、マイナスのイメージに受け止められ易い。しかし、実際には技術上の問題が減少し、その分、強弱や速度の調整をしたり、タイミングを合わせたりすることが容易となる。そのため、結果として演奏の完成度が高まり、より豊かな表現をすることが可能となる。そこで、岩田版Ⅱの一部において「簡略化」を採用した。

譜例5は岩田版Ⅰと岩田版Ⅱの同じ部分を比較したものである。岩田版Ⅰの2小節目から最高声部にみられる速いソパッセージ及び、1段目4小節目にみられる付点音符を含んだ三連符を、岩田版Ⅱでは簡略化した。速いソパッセージの部分は、音高に比例して音量が大きく聞こえる点に着目し、クライマックスに向けて音高を上げていくことにより表現をし易くした。また、簡略化によって音楽的魅力が下がることがないように、オブリガートなどの対位的な手法を用いた。

図1 岩田版Ⅱの全体構成



※歌と間奏は1小節重なっている。

譜例5 (B : 9~12小節目)

[岩田版I]

[岩田版II]

また、オーケストレーションについては、岩田版Iでは、演奏効果の点から、一つの声部を複数のパートで演奏するような厚いオーケストレーションを施さなかった。エリクソン⁸は、初級バンドにおいてはオーケストレーションが薄くなると奏者が自信を無くしてためらってしまい、演奏の荒さが目立つようになることを指摘しており、編曲する際には曲に変化や対比を持たせるために「別の方法」⁹を探さなければならないと述べている。エリクソンが提唱するような教育的配慮は、アメリカの作曲家による小編成吹奏楽向けの作品によく見られる。確かに、これらの作品は演奏経験の浅い奏者が安心して吹けるため、演奏の荒さは目立ちにくい。しかし、岡田が言うように、教育的配慮が為された小編成吹奏楽向けの作品には、技術的に平易で音楽

的魅力に乏しい、いわゆる「入門用」とされるものが多いのも実情である¹⁰。

以上から、岩田版Iよりも厚いオーケストレーションを施すものの、音楽的魅力に乏しくることがないように、オブリガートの追加や「色彩的な打楽器」¹¹の使用をして、課題の解決とした。

たとえば譜例6は、岩田版Iでは、譜例1の部分のメロディを2パートのB \flat クラリネットと1パートのフルートで演奏するオーケストレーションを実施していた。この部分が作品全体を通じて、最もオーケストレーションの薄い部分であったため、岩田版IIではB \flat クラリネットを3パートに増やすとともに、フルートをホルンに変更することでオーケストレーション的な課題の

解決を図っている。

譜例6 (B : 1~4小節目)



3.4 演奏および質問紙による二次調査

附属中学校吹奏楽部における実践後、吹奏楽部の生徒及び指導者を対象とし、岩田版Ⅰと同様、岩田版Ⅲについての質問紙調査を行った。

以下は、附属中学校吹奏楽部の生徒23名の調査結果である(表3)。

先の岩田版Ⅰにおける評価の全体平均が技術的な点は4.1、表現のし易さは3.3という結果であったのに対して、岩田版Ⅱでは、どちらの項目も2.3という結果になった。特に技術的な点に関しては、「吹き易かった」「リズムが分かり易かった」という記述をしている生徒が約半数みられた。

指導者からの評価は、技術的な点及び表現のし易さが4(1:不適 ~ 5:適)、オーケストレーションにおいても4(1:悪 ~ 5:良)、演奏効果が3(1:低 ~ 5:高)という結果であった。岩田版Ⅰにおける評価は、技術的な点が2、表現のし易さが4、オーケストレーション及び演奏効果が3という結果であったことから、岩田版Ⅱでは評価が向上していることが分かる。

これらの結果から、岩田版Ⅲは岩田版Ⅰに残っていた課題を解決し、生徒にとって演奏し易い編曲になっていることが分かる。歌うことが可能な原調へ戻した点も併せて鑑みると、本研究における岩田版Ⅲは生徒の実態に応じた編曲であるといえる。

表3 質問紙調査結果(生徒)

・演奏してみてどう思いましたか?(1:易しい ~ 5:難しい)

	Fl.	Cl.	Sax.	Trp.	Hrn.	Trb.	Euph.	Tuba	Perc.	全体
技術的な点	-	2.4	1.8	2.0	3.0	2.3	2.0	2.0	2.8	2.3
表現のし易さ	-	2.6	2.0	2.0	3.0	2.7	2.0	1.0	2.3	2.3

3.5 鑑賞比較調査

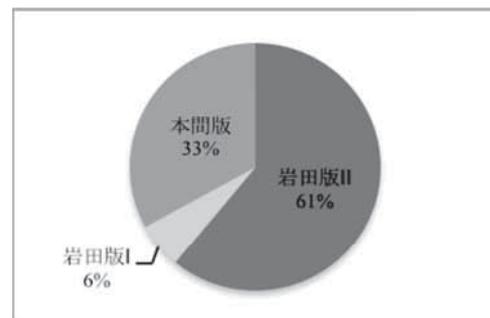
一連の校歌の編曲研究後、事後調査として、校歌三種類:附属中学校吹奏楽部が普段演奏に用いている編曲(本間版)、岩田版Ⅰ、岩田版Ⅱの鑑賞比較調査を行った。この調査は、附属中学校吹奏楽部1~3年生(36名)を対象としており、調査内容は(1)どの版の校歌が最も好きか(2)聞き比べてみてどう感じたか、という二項目である。

鑑賞においては、演奏技術に差異がないように、全ての版の演奏を高知大学教育学部生涯教育課程芸術文化コース管・打楽器専攻生の演奏に統一して録音し、調査に用いた。

以下は、校歌三種類の鑑賞比較調査の結果である(図2)。

図2 聞き比べ調査結果

Q. どの版の校歌が最も好きですか?



どの版の校歌が最も好きかという質問に対し、生徒からの回答は本間版が33%、岩田版Ⅰが6%、岩田版Ⅱが61%であり、生徒に最も評価が高かったのは岩田版Ⅱという結果になった。岩田版Ⅱを選んだ理由としては、「華やかな感じで良いと思った」というものが多くみられ、「他のより安定している」という回答もあった。

岩田版Ⅲに次いで生徒が好きだと回答したのは本間版である。本間版を選んだ理由としては、「よく聞き慣れた校歌だから」「シンプルで校歌らしい」という回答があった。さらに、「岩田版Ⅰ、Ⅲは派手過ぎかなと思った」「本間版はすっきりしていて岩田版Ⅰ、Ⅲはいろんな動きがあって少しごちゃごちゃしていた」という回答をした生徒もみられる。すなわち、生徒は、普段から演奏し慣れている本間版よりも複雑なテクスチャを持つ岩田版Ⅰ、Ⅲに違和感を感じていると推察することができる。

また、「岩田版Ⅱの最後がそれまでにやっていたメロディと違っていた」という音楽的構成に関する記述（1名）や、「岩田版Ⅰはきれいな感じだけどメロディを吹いている人数が少ないと思った」「3種類とも音の薄いところがあってそれぞれのパートの音色が出ていた」などのオーケストレーションに関する記述（5名）もみられた。

以上から、生徒は今回の演奏や鑑賞比較を通じて、編曲による音楽的構成の変化やオーケストレーションの違いを聞き分け、それぞれの特徴を読み取っていることが分かる。

IV 編曲に関する考察

ここでは、高知大学附属中学校校歌岩田版Ⅱの編曲について考察してみたい。

まず、その前に、原曲の旋律と楽曲構成について、詩との関連も含めて分析することから始めたい。

4.1 高知大学教育学部附属中学校校歌「みなもとと遠く」の詩と音楽の分析

高知大学教育学部附属中学校校歌「みなもとと遠く」の詩は、一見、七五調の決まったリズムで構成されているため、作曲し易いように思える。しかし、(七、五)の反復が5回であることから、それを、音楽形式的にまとまりのあるものにするには、いささか苦勞を伴う。次の(表4)を参照していただきたい。

実際、原曲は、この5回の反復をそのまま5つの小楽節に置き換え、単純3部形式A (aa') B (b) C (c,c')を基礎として構成している。しかし、中間部Bは、8小節に満たず、cは、実際には2小節分の長さである。例えば、次の例(表5)と比較すると、その不均衡さが際立っている。

下記「荒城の月」(表5)は、16小節による典型的なA (aa') B (b,a')型の単純二部形式に則って書かれており、極めてまとまりがよい。この形式は、4つの小楽節から成り起承転結がはっきりしている上、a'が最後に再現されるシンメトリー形式で安定感がある。詩は、「みなもとと遠く」と同じような七五調の定型詩であるが、丁度4回繰り返される七五の言葉のリズムが、旋律のリズムと音楽形式を決定づけているのである。

以上の比較によって、高知大学附属中学校校歌「みなもとと遠く」は、やや変則的な音楽形式によって作曲されていることが分かる。しかし、変則的であることが、音楽的魅力を妨げることになるとは必ずしも言えない。むしろ、そこから作曲技法上の工夫を見つけ出すこともできる。例えば、唯一、行進曲風の4分の2拍子で書かれたcの部分、レガート風のbばかりか、

表5「荒城の月」作詞：土井晩翠 作曲：滝廉太郎

詩		音楽			
シラブル	1.	小楽節		大楽節	
七	春高樓の	a	4	A	8
五	花の宴	a'	4		
七	めぐる盃	b	4	B	8
五	かげさして				
七	千代の松が枝	a'	4	C	8(6)
五	わけいでし				
七	昔の光	c'	4	C	8(6)
五	いまいづこ				

表4「みなもとと遠く」作詞：内田八朗 作曲：真鍋伝一

詩			音楽				
シラブル	1.	2.	3.	小楽節		大楽節	
七	みなもとと遠く	あかきのみ山	ああすぐれたる	a	4	A	8
五	玉を溶き	うちなびけ	学びやの	a'	4		
七	すどはるばると	雲吹き落とせ	庭はあけぼの	b	4	B	4
五	海に入る	初あらし	露深し				
七	水こそかがみ	しひの若森	望みぞ多き	c	4(2)**	C	8(6)
五	朝夕に	譲り葉の	まさかりの				
七	いそむ窓の	栄ゆるみどり	しろつめぐさの	c'	4	C	8(6)
五	花おうち	目もさやに	幸分けて				
七	ゆかりの色に	自治の校風	少年の日を	c'	4	C	8(6)
五	にほふかな	ふるふべし	楽しまん				

※この曲は基本的には4/4拍子であるが、この部分のみ2/4拍子×4小節で書かれており、4/4拍子換算では、2小節分の長さに相当する。

4分の4拍子で書かれた他の全ての部分と比較しても、かなり異色である。にもかかわらず、この旋律のリズム素材は、多少の変化を伴いつつも、次に2倍の音価に拡大されて出てくることになる最終cへの布石となっており、決して、著しく逸脱した手法とも言えない。このようなことから、各部の対比や曲全体の統一性に、一定の配慮をしていることが窺える。

4.2 編曲にあたっての留意点

当然のことながら、実際に編曲するには、まず、こういった言葉と旋律、あるいは詩と音楽の特徴を分析した上で、オーケストレーションを含む全体構成や、より細部の対比について検討しなければならない。と同時に、どこに編曲者の独自の解釈を持ちこむかということについても吟味する必要がある。例えば、旋律自体は変えられないが、伴奏型やテクスチュアの変化、及び、和声づけは、自由な余地を残しており、工夫次第で、言葉の意味や詩の情景を強く表現することが可能であろう。また、限りなく原曲に忠実に編曲するにせよ、編曲者の獨創性を前面に出すにせよ、楽器の特性に応じた吹奏楽ならではの効果的な語法をも模索すべきである。そのためには、原曲ピアノ伴奏譜を参考としながらも、それに拘泥し過ぎることなく、むしろ、意図するところの表現を組み取り、相応しい書法に移し替える柔軟さが求められる。

次に、旋律に目をやると、この楽曲の旋律の音域は、全体を通して長9度の範囲内におさまっており、比較的歌いやすいのだが、半面、最高音(d音)が5回(同音連打は1回と数える)もあるため、やや単調に陥りやすい。そのため、形式の問題と合わせ、緊張と弛緩をどのように設定するか、また、どのようにクライマックスを演出するか、綿密なプランが必要である。

最後に、記譜についてであるが、強弱記号、アーティキュレーションをはじめ、原譜にない情報については、当然、必要に応じて、解釈を加え、適切な指示を記入していかなければならない。

4.3 「岩田版Ⅱ」における編曲技法について

このようなことを踏まえて、では、岩田版ではどのように吹奏楽編曲が行われているかを、全体構成、ハーモニー、テクスチュア等の側面から述べる。文章中の大文字、小文字のアルファベットは、練習番号ではなく、前記形式上の区分を表す。

(1) 全体構成：

① A (aa') (4-11 小節目)

上記形式に則って調べてみると、まず、Aの部分の旋律は、3つのパートのクラリネットにホルンがユニゾンで重ねられ、シンコペーションを基調とした弾むようなリズムによる伴奏部は、主にトロンボーンやテューバといった低音金管楽器によって担当されている。「岩田版Ⅰ」のフルートに代わりホルンが使用されたが、メロディの輪郭を際立たせ、力強さを与える上では、ホルンの方が有効であろう。後半部分、主旋律の上昇に伴いテナー・サクソフォンとユーフォニアムによる対位旋律が現

れ、主旋律にも楽器が重ねられていく部分は、自然な昂揚感が感じられる。

② B (b) (12-15 小節目)

楽器の使用はある程度制限されているものの、活き活きとした息遣いの感じられるA(mf)に対し、B(mp)では、ホルン以外の金管の使用が避けられ、伴奏部もレガート奏法のクラリネットに受け継がれており、やさしく抒情的な印象に仕上げている。この部分の原曲メロディが、最高音d音に2度達するなど全曲中でもかなりの高音域にあることを考えると、mfからmpへのダイナミクスの変化は、メロディの抑揚に反していると思われるかもしれないが、むしろ、これにより、次のCより後半の盛り上がり演出する意図が明確になる。定石通り、旋律の抑揚に準じた強弱の設定も考えられることから、この部分は、編曲者が、一歩、踏み込んだ解釈を行ったことになる。実際、原曲のピアノ伴奏部は、Bの部分に厚みが加えられている。

さらに、前奏を除き、Bの最終小節に至るまで、トランペットの登場を、注意深く忌避していることを付記しておく。このことが、次のC部(特に前半c')の特異性を一層際立たせることになるのである。

③ C (c,c') (16-23 小節目)

Cの前半部(c)は、主旋律に、トランペットとやや高音域のクラリネットという硬質な響き選ばれており、特に、トランペットの登場は、新鮮な驚きを持って迎えられる。スタカート奏法、fの指定も相俟って、ともすれば、荒っぽい演奏に陥りやすいところであるが、細心の配慮がなされた際には、よい演奏効果が発揮されるであろう。曲想通り、明るい音色が求められるところである。唯一4分の2拍子によるこの部分は、前述のように、次のc'の2分の1縮小リズムによってメロディが構成されているが、編曲者は、ここを、全曲中、最も変化のある部分と捉え、*alla marcia*の表記の基に、音色、音量、アーティキュレーション、他、全ての要素において際立った対比を試みた。後半部(c')では、全曲におけるクライマックスの設定がはっきりと読み取れ、fからffに到達する際には、フルートやクラリネットの16分音符の上昇するスケールが、それを自然な形で助長している。「岩田版Ⅰ」の反省を踏まえ、こういった速いパッセージは極力避けることを意識してきたが、敏捷性に富むフルートやクラリネットの楽器の特性上、この程度の演奏技術は、さほど問題とされず、むしろ、*cresc.*の効果を確かなものとするため、適切な処置であると言える。

④ 前奏 (1-3 小節目) と後奏 (26-30 小節目)

以上の他、前奏と後奏についても述べておきたい。前奏は、「岩田版Ⅰ」では、スケール、トリルの輝かしい音色的効果や金管の躍動的なリズム等を用いて、華やかな印象を与えていたが、その分、演奏は、中学生にとってやや困難を要する部分があった。今回は、校歌の最後のフレーズを使用したことにより、オーソドクスではあるが、中学生にも分かりやすく、演奏も容易になった。岩田版Ⅰになかったコードの追加は、些か常套的ではある

が、最後のフレーズ「におうかな」の2倍拡大リズムによるリフレインで出来ており、直前の25小節目の偽終止(VI)の意外性と相俟って、絶大な終止の効果を生み出している。最後の3小節(28-30小節)の金管の壮大なコーラルも演奏効果が高い。

⑤ 全体

全体を通してみると、およそ、以下のような流れになる。即ち、力強い序奏に始まり、A(aa')では活き活きとした曲想、B(b)では、やや控えめで繊細な表現、Cでは、軽やかで楽しげなc「いそむ窓の 花おうち」から一気にクライマックスへ駆け上がるc「ゆかりの色に にほふかな」へ進む。3番まで繰り返し、壮大で華やかなコーダで曲を閉じる。綿密な時間構成は、原曲の旋律のイメージをより確かなものとし、さらには、メロディが描ききれなかった詩の細かなニュアンスまでも、より生き生きと描き出すことに成功している。

岩田版編曲では、ハーモニーの選択も、楽曲の性質を印象付ける重要な要素となっている。このことは、岩田版Iにも共通して言える。原曲の和声は、1箇所ドッペル・ドミナントを除いて、全て固有和音のみの極めてシンプルな構成に依っている。

しかし、その書法には、バス進行を含め、いくつかの不自然な点が見受けられることから、編曲の際に若干の修正を検討しなければならない。本間版は、基本的に、原曲の和声進行をほぼ踏襲していると言える。これに対し、岩田版IIでは、これらの問題点に修正を施しつつ、さらに、流れるような順次進行によるバスラインの構築、他調ドミナント、準固有和音、七や九の和音等の多用による洗練された和声書法が意識されており、音の推進力に凝みがない（譜例7）。

(2) テクスチャ :

編曲者自身も述べているように、オーケストレーションは、全体的に岩田版Iより厚く、中学生が安心して演奏出来るようになってきている。速いパッセージや複雑なリズム（特に、発音に難があり、本来、木管楽器ほどの俊敏さを持たない金管楽器において）を避け、簡略化することによって、演奏も容易になった。岩田版Iでは、個々の演奏者の技量と主体性、各パートの役割の掌握と音量や音色のバランスが求められるが、中学生が、少ない練習時間の中で仕上げるには、いささか難しい部分もあった。

譜例7

高知大学教育学部附属中学校校歌
「みなもとと遠く」冒頭部分の和声分析（比較）

和声の工夫と順次進行によるなだらかなバスラインの構築

借用和音の使用

バスの修正（終止におけるバス進行）

即ち、一定の技量、一定の読譜力、一定の練習時間といった諸条件が達せられた場合には、複雑なテクスチャが輝かしい効果をもたらすが、そうでない場合は、意図した効果を得られにくい。そのような意味では、岩田版Ⅱのテクスチャは、よりシンプルで風通しがよく、容易に効果を得られやすい。ちなみに、この編曲版では、ダイナミクスは、ほぼ全て *mp* 以上に設定されており、中学生が委縮することなくのびのびと演奏できるよう工夫されている。

(3) その他：

全曲にあたり、アーティキュレーション、強弱、表情記号等、適切な指示がなされている。指示が細かすぎると、演奏もその分、困難になるが、その点、過度にならない程度に書き込みがなされ、演奏の手引となっている。また、これらは、原曲ピアノ伴奏譜に未表記で、曖昧だった表現を、補足する狙いもある。当然、そこには編曲者の解釈が介入してこよう。二、三の例としては、冒頭の *Allegretto con spirito* の速度、及び曲想の指示、メロディパートのテヌート、テヌート・スタカート、スラーや伴奏パートの種類の違うアクセントといった微妙なアーティキュレーション。12小節目のアルト・サクソフォンによる主旋律 *dolce* に対する、ソロ・ホルンの対旋律 *espress.* の指示。いずれも明確なイメージを喚起するものであり、情報としても適切である。

4.4 まとめ

以上のように、岩田版Ⅱでは、岩田版Ⅰの課題を踏まえて演奏技術に配慮しつつも、その範囲内で、最大限の演奏効果をあげられるよう、簡略化のみならず、ハーモニーの工夫やテクスチャの多様性等、様々な工夫がなされていることが証明される。しかし、岩田版Ⅱは、技術的にも、表現の面でも、飛躍し過ぎたきらいがあり、アンケートでも支持を伸ばすことが出来なかった。一方、本間版は、原曲に忠実に編曲するというスタンスを

貫いており、その親しみやすさが、2番目の高評価を得た要因であると思われる。しかし、例えば、原曲にあるピアノ書法に特有のアルペジオの伴奏音型等は、吹奏楽では、別の効果的な書法に置き換えることも、また可能であろう。原曲の和声書法上の問題についても、柔軟な処置を検討してもよい。岩田版Ⅱの成果は、演奏技術と演奏効果の両立、原曲の有するイメージの保持と編曲による創造性の共存にあり、このバランスの良さこそが、高評価を得た要因であると言える。

最後に、オーケストレーションは、音楽の時間構造と切り離して考えることは出来ず、それ故、編曲の際には、詩と音楽の形式、構成、旋律構造等についての詳細な研究が不可欠であることを、以上の分析から再確認しておきたい。

V 今後の課題

本研究を通して、岩田版Ⅲは岩田版Ⅰに残っていた課題を解決し、生徒にとって演奏し易い編曲になった。その過程を通じて、生徒の実態に応じた編曲を行うためには簡略化を行うこと及び、オーケストレーションを薄くし過ぎないことの重要性が明らかになった。また、事後調査から、生徒たちが原曲と編曲の演奏や鑑賞を通じて、楽曲の構成を意識することができた。このような経験は、生徒たちの演奏や音楽性にとって有益であったと考えられる。

本研究は中学校吹奏楽部の一事例であるため、今後は更に実践例を増やしていくとともに、高等学校吹奏楽部の生徒の実態に応じた編曲の実証的検討も行っていきたい。

謝辞

本研究を通じて、高知大学教育学部附属中学校吹奏高知大学教育学部附属中学校吹奏楽部顧問の畠山裕世先生、吹奏楽部の皆さんにご指導・ご協力いただきました。感謝申し上げます。

資料：楽譜 1

高知大学教育学部附属中学校校歌

みなもととおく

内田八朗 作詞
真鍋伝一 作曲

♩=104

5

なか もの と と お く た ま ま ー を と き す ー
あ き す と の み れ お や た く ま る た う ま ま ち な ー な び と ひ や き の す くに

9

えも は ふ る ぼ る と と せ う み ー に い ら る み
わ お は ふ あ お け と ほ の は つ つ ゆ ー あ ふ か し し の

13

ずい こ そ か が み あ ー さ ー ゆり う に
ぞ の み わ お お き ゃ ま ー す き ー か は り の

17

い そ し ゆ む ま ど の は な も お お う や ち
し せ ろ つ つ め な り の き ま ち わ け け て

21

ゆ か り の い ろ に お ー う か な ー あ ん
じょ ち ら の こ ん の う ふ ひ に う を た の ー う し か べ な し あ

1. 2. 3. rit.

楽譜 2

[Full Score]

岩田版II
みなもと遠く～高知大学教育学部附属中学校校歌～
for Wind Band

真鍋辰一 作曲
岩田憲知 編曲

Allretto con spirito (♩=104~112ca.) A

Flute 1
Flute 2
Oboe
Bassoon
E♭ Clarinet
B♭ Clarinet 1
B♭ Clarinet 2
B♭ Clarinet 3
B♭ Bass Clarinet
E♭ Alto Saxophone 1
E♭ Alto Saxophone 2
B♭ Tenor Saxophone
E♭ Baritone Saxophone
B♭ Trumpet 1
B♭ Trumpet 2
B♭ Trumpet 3
F Horn 1
F Horn 2
Trombone 1
Trombone 2
Trombone 3
Euphonium
Tuba
String Bass
Tingpani
Percussion 1 Glockenspiel
Percussion 2 Snare Drum
Percussion 3 Triangle, Crank, Castanols, Suspended Chantal

みなもとと遠く -Full Score-

The score is arranged in a standard orchestral layout. The top section includes Flutes 1 & 2 (Fl. 1, Fl. 2), Oboe (Ob.), Bassoon (Bsn.), and English Horn (E♭ Cl.). The middle section features Clarinets 1, 2, & 3 (Cl. 1, Cl. 2, Cl. 3), Bass Clarinet (B. Cl.), Alto Saxophones 1 & 2 (A.Sax. 1, A.Sax. 2), Tenor Saxophone (T.Sax.), and Baritone Saxophone (B.Sax.). The bottom section contains Trumpets 1, 2, & 3 (Trp. 1, Trp. 2, Trp. 3), Horns 1 & 2 (Hrn. 1, Hrn. 2), Trombones 1, 2, & 3 (Tbn. 1, Tbn. 2, Tbn. 3), Euphonium (Euph.), Tuba, Snare Drum (Sn. Dr.), Tom-toms (Tamp.), and Percussion 1, 2, & 3 (Perc. 1, Perc. 2, Perc. 3).

Key musical markings include *mf* (mezzo-forte) and *espress.* (espressivo) in the lower woodwinds and brass sections. The strings (not explicitly labeled but present in the lower staves) feature *dolce* (dolce) markings. The score is written in a key signature of one sharp (F#) and a common time signature (C).

みなもとと遙く -Full Score-

The musical score is divided into three systems, each containing multiple staves for different instruments. Section B is marked with a box 'B' and Section C with a box 'C' and the tempo marking 'alla marcia'. The score includes dynamics such as *mp*, *mf*, *f*, and *espress.*. The percussion section includes snare drum (Sn.), tom-tom (Tom.), and cymbal (Cym.).

System 1: Flutes (Fl. 1, Fl. 2), Oboe (Ob.), Bassoon (Bsn.), Clarinets (Cl. 1, Cl. 2, Cl. 3), Bass Clarinet (B.Cl.), Saxophones (A.Sax. 1, A.Sax. 2), Tenor Saxophone (T.Sax.), Bass Saxophone (B.Sax.).

System 2: Trumpets (Trp. 1, Trp. 2, Trp. 3), Horns (Hrn. 1, Hrn. 2), Trombones (Tbn. 1, Tbn. 2, Tbn. 3), Euphonium (Euph.), Tuba, Snare Drum (Sn.B.).

System 3: Timpani (Timp.), Percussion 1 (Perc. 1), Percussion 2 (Perc. 2), Percussion 3 (Perc. 3).

みなもとと遠く -Full Score-

D

Fl. 1, 2
Ob.
Bsn.
Cl. 1, 2
Cl. 3
B.Clar.
A.Sax. 1, 2
T.Sax.
B.Sax.
Ttp. 1, 2
Ttp. 3
Hrn. 1, 2
Tbn. 1, 2, 3
Euph.
Tuba
Sn. Dr.
Timp.
Perc. 1, 2
Perc. 3

27 28 29 30

D

1, 2

D

1, 2

C-Cross

みなもとと遠く -Full Score-

This page contains the full score for the piece "Minamoto to Tooku". The score is divided into three systems, each starting with a "Refrain" section. The first system includes woodwinds (Flutes 1 & 2, Oboe, Bassoon, Clarinets in E-flat, C, and B-flat, Saxophones in A, Alto, Tenor, and Baritone) and strings (Violins 1 & 2, Viola, Cello, and Double Bass). The second system includes brass instruments (Trumpets 1, 2, and 3, Horns 1 and 2, Trombones 1, 2, and 3, Euphonium, and Tuba) and the beginning of the percussion section (Snare Drum). The third system continues the percussion section with Tom-toms, Congas, and Cymals. The score includes various musical notations such as dynamics (ff, f, mf, p), articulation (accents, slurs), and performance instructions like "rit." (ritardando) and "a tempo". A rehearsal mark "E" is placed at the beginning of the "a tempo" section in each system. The score concludes with a copyright notice "© Cymys" and the year "2012".

註

¹ 岡田知也・井上智司、「中学校における小編成の吹奏楽部活動に関する研究—編曲の実践と検証—」、『香川大学教育実践総合研究』12、2006、47-58頁

² 平成23年度後期および平成24年度前期の高知大学大学院授業科目「教育実践研究Ⅰ・Ⅱ」で行った編曲であり、第一次調査、第二次調査はこの授業内で行ったものを元としている。

³ 現在、附属中学校で用いられている吹奏楽用楽譜は、現宿毛高等学校勤務の本間大介氏の編曲である。以下、「本間版」としている楽譜は、本間大介氏の編曲作品を、本稿で簡易総譜化したものである。

⁴ これは附属中学校吹奏楽部員が回答した言葉のままであるが本来の連符の意味だけではなく、速いパッセージの意味も含まれていると考えられる。

⁵ 質問紙調査は、観察者にも行ったが、ここでは割愛した。（岩田版Ⅱの質問紙調査も同様である。）

⁶ 菅原克弘、「吹奏楽における演奏効果が高く、演奏技術は平易な編曲方法に関する研究①—小学校における全校合奏用編曲の場合—」、『北翔大学生涯学習システム学部研究紀要』第8号、2008、81-89頁

⁷ 菅原によれば、旋律そのままを演奏するのではなく、旋律の骨格となる音のみを演奏したり、分割をしたりすることである。

⁸ F. エリクソン、伊藤康英 訳、「初級バンドのための編曲」、『バンドのための編曲法 わかりやすいオーケストレーション』東亜音楽社、1990

⁹ オーケストレーションの厚薄以外の方法。例えば伴奏形の変化などを指す。（F. エリクソン、前掲、153頁）

¹⁰ 前掲、岡田知也・井上智司、「中学校における小編成の吹奏楽部活動に関する研究—編曲の実践と検証—」、50頁

¹¹ F. エリクソン、前掲、153頁